

〈青年〉史研究序説

—— 〈青年〉の誕生を再考する ——

和 崎 光太郎*

An Introduction of the Study on the History of Youth : Rethinking the Origin of the Concept of Youth

(WASAKI Kotaro)

1. 序論—— 〈青年〉の歴史を論じるにあたって——

(1) 「青年」と「若者」

青年は、いつの時代にもいた、ありふれた存在のように思われているかもしれない。しかし今日では、青年の現状を嘆いたり、「青年とはかくあるべき」と理想的な青年像を打ち立てたりといった青年論は、すっかり影を潜めてしまった。代わって台頭してきたのは、若者論である。古市憲寿の調査によれば、「青年」に代わり「若者」が論じられ始めたのは、1960年代後半の「若者論ブーム」からで、それ以降、「若者」論は1990年代に一度凋落を見た以外は流行を保ってきたとされる¹。

試みに、国立国会図書館に所蔵されている書籍のうち、タイトルに「青年」を含む書籍、「若者」を含む書籍それぞれを、1960年代前半最後の年である1964年から10年ごとに検索し、刊行点数を比較してみよう（2015年9月6日検索、本文が日本語の書籍のみ）。1964年では「青年」33点、「若者」1点と、古市の言うように1960年代前半の「若者」はまだ一般的に馴染みのない言葉であった²。ところが10年後の1974年には「青年」31点、「若者」11点となっており、すでに「若者」という言葉は市民権を得ていたようである。1984年は「青年」37点、「若者」8点、1994年は「青年」34点、「若者」13点と、80年代・90年代にはさしたる変化がない。しかし2004年には「青年」45点、「若者」46点となり、「若者」が増加し「青年」に並ぶ。さらに10年後の2014年には、「青年」35点に対して「若者」85点と、「若者」が急増して「青年」の約2.4倍になる。この結果から、1964年からの50年間で「青年」をタイトルに含む書籍の刊行点数は

* 京都市学校歴史博物館学芸員・
近畿大学教職教育部非常勤講師

〔キーワード〕 青年、徳富蘇峰、大江義塾、立志、壮士

さほど変わっていないが、「若者」をタイトルに含む書籍の刊行点数は1964年から1974年の間で増加、1994年から2014年の間で急増したと言える³。

ただし、この作業はあくまで両者の使用頻度を概観的に比較したにすぎない。そこで次に、タイトルに含まれる「青年」と「若者」がそれぞれどのように用いられているのか見てみよう。

タイトルに「青年」を含む書籍で、1964年に刊行されたものは、林房雄の『青年』⁴の他に、『青年に答う』⁵、『青年らしい手紙文の書き方』⁶などであり、「青年」という一群が社会に存在していることを前提としたタイトルが確認できる。しかし20年後の1984年に刊行された書籍のタイトルからは、このような単独での「青年」が消え、「青年美術展」、「青年教師」、「農業青年」などの形容詞的用法、または「～青年」といった複合名詞が目立つ。2014年刊行の書籍のタイトルでも、「青年研究者」「地域青年」「高学歴失業青年」「青年実業家」「青年海外協力隊」など形容詞的用法か複合名詞がほとんどで、それ以外の「青年」の用法は、歴史書⁷を除くと皆無と言ってもよい。

一方、2014年刊行でタイトルに「若者」を含む書籍では、『逃げる中高年、欲望のない若者たち』⁸のように、そのほとんどのタイトルで形容詞的用法でも複合名詞でもなく単独で「若者」が用いられている。2011年に刊行されベストセラーとなった『絶望の国の幸福な若者たち』⁹のタイトルが、仮に『絶望の国の幸福な青年たち』だったとすると、多くの人は「青年」という言葉に、古めかしく硬い感じを抱くであろう。この前年には『「若者はかわいそう」論のウソ——データで暴く「雇用不安」の正体——』¹⁰という本も刊行されており、「かわいそう」なのはやはり「青年」ではなく、「若者」である。

そもそも、形容詞的用法の場合や、前に「地域」や「高学歴失業」をつけて複合名詞にした場合だと、「青年」を「若者」に置き換えることができない。試しに上記に挙げたタイトルの「青年」を「若者」に置き換えてみると、「農業若者」、「若者研究者」、「若者実業家」などとなり、違和感を覚える。この違和感の存在が、かろうじて「青年」が用いられ続けている理由ではなからうか。つまり、「青年」はもはや、少なくとも単独で用いられる概念としては、「若者」に取って代わられたのである。

ただし注意しなければならないのは、取って代わられたのはあくまで概念としての「青年」だということである。「青年」と呼ばれ、「青年」を自称する者たちの実態については、「青年」概念とは分けて考えなければならない。ゆえに本稿では、概念としての青年のことを〈青年〉、青年と呼ばれる者もしくは自称する者を「青年」と表記して区別し、論を進めたい。

(2) 〈青年〉を問うということ

ある言葉が別の言葉に置き換えられたということは、その言葉が示すものの意味やイメージに変化が起きたということである。よって、「青年」や「若者」の歴史を論じるにあたり、この置き換えがどのように進展したのか、「青年」はもう完全に過去概念になってしまったのか、といった問題は、無視できない重要な論点となる。

しかし残念ながら、我々にはこの問題を論じる準備ができていない¹¹。というのも、そもそも我々は、〈青年〉が「年の若い者」「未熟な者」という辞書的な意味の奥にどのようなイメージを持ち合わせているのか、〈青年〉を語る時に対象にどのような眼差しを向けているのかということ、まだ知り得ていないからである。

〈青年〉がこれまで全く研究対象にならなかったわけではない。〈青年〉が自由民権運動末期の明治20年代初頭に誕生した近代特有の概念であることは、これまで幾度か論じられてきた¹²。しかし既往の研究では、誕生した後の〈青年〉は、「青年」を対象とした歴史研究においてすらも自明なものとして扱われてしまい、意味やイメージを変容させてきた概念としては位置づけられてこなかった。これは〈青年〉に限ったことではないが、単に、「歴史貫通的な概念ではなく近代特有の概念である」と指摘するだけでは、その概念を説明したことにはならない。近代特有の概念であることを史料に基づき確認した上で、近代史上の各時期における意味変容、様々な語りのパターンの派生、概念としての魅力¹³などを、各時期ごとの社会的背景に基づき実証的に明らかにすることで、初めてその何たるかを知り得るのである。

このような問題意識に基づいて、筆者はこれまでいくつかの小論をまとめてきた¹⁴。そこでは主に明治30年代を対象に、〈青年〉の意味変容を論じてきた。しかし、それ以前の明治20年頃における〈青年〉の誕生について、既往の研究で十分に議論され尽しているかと言えば、そうではない。

そもそも「青年」という言葉は、前近代では主に「年の若い」という形容詞的用法で用いられており¹⁵、今日のように名詞で「青年」が用いられたのは、小崎弘道が明治13年に“*Young Men's Christian Association*”を「基督教青年会」と訳したのが最初とされる¹⁶。小崎自身も当時のことを自伝で、『ヤングメン』の適当なる訳に窮し『若年』『壮年』又は『少年』などといふ語を用ひて居た」状況で、「私の草案したものである『青年』といふ語」をあてはめ「青年会」と命名することになったという¹⁷。確かに、キリスト教の青年会に限らず、明治10年代半ばに誕生した地方の若者集団も青年会を名乗り¹⁸、明治20年代初頭には自由民権運動の担い

手であった「壮士」に代わる新しい存在として、少年と成人との「中間領域」である〈青年〉が誕生¹⁹したことを考えると、小崎の翻訳以降に「青年」という言葉が広まったことは間違いないだろう。また、この「〈青年〉の誕生」が実態よりも概念が先行して進んだことは、すでに木村直恵による緻密な研究がある²⁰。

問題は、その「壮士」の対抗概念としての〈青年〉が、どのような経緯で誕生し、その後どうなったのか、である。本来は、〈青年〉の史的研究を進めるにあたってはこの問題から議論しなければならないのだが、従来の研究では、〈青年〉論の旗手である徳富蘇峰における〈青年〉が、蘇峰の置かれた社会的立場や論じた時期の違いによって変容をともしながら構築されたことが見過ごされてきた。そこで本稿では、〈青年〉がどのように、いかなる概念として誕生したのかを、蘇峰の論説やそこで用いられた言葉、概念をもとに再検討する。まず、明治10年代における〈青年〉の用法を確認した上で、蘇峰が初めて〈青年〉を主題として論じた明治18年から上京後に『国民之友』を創刊した同20年までを射程とし、論じていきたい。

2. 大江義塾時代の蘇峰における〈青年〉

熊本バンドの結成に参加し、同志社英学校で学んだ蘇峰は、小崎が明治13(1880)年に young man を「青年」と訳してまもなく、「青年」という言葉を用い始めた。明治15(1882)年、数えて20歳の蘇峰は郷里の熊本で大江義塾²¹を開くにあたり、同年2月の「私立義塾設立伺書」において教育対象を「青年ノ子弟」²²としている。また、熊本県下の名望家に向けて書かれた明治18(1885)年3月の大江義塾「塾金募集趣意書」²³では、1,100字あまりの短文で「青年」が計6回用いられており、この趣意書のキーワードの一つとなっている。ただし、まだこの時の蘇峰は、「青年ノ子弟」「青年有志」「我輩青年書生」と、「青年」を「年の若い」という形容詞的用法または複合名詞として用いており、それ以上の特別な意味は込めていない。このような用法は、明治10年代半ばの作文投稿雑誌『穎才新誌』に掲載された中立青年自由党や青年自由党といった民権結社の旨意書における「青年志士」²⁴「青年輩」²⁵と同じである。つまり、明治18(1885)年3月時点での蘇峰における「青年」は、まだ young man の訳語、もしくは単に「若い」を意味する用語であり、それ以上の特別な意味は込められていなかった。

初めて蘇峰が〈青年〉を主題として論じたのは、大江義塾の「大飛躍の年」²⁶である明治18(1885)年4月に同塾で行われた演説をまとめ、同年6月に脱稿した「第十九世紀日本ノ青年

及其教育」においてである。ここで蘇峰が説く〈青年〉は、「性質嫩柔。神經鋭尖。外物ノ刺衝ニ敏捷ナル」、「楊柳ノ長條カ風ニ従フテ搖々タルカ如ク。社会ノ風潮ニ従フテ傾向スル」²⁷ 存在、つまり可塑的であり外界の影響を受けやすく、主体性のない存在であった。ただし蘇峰はこれに続く部分で、「彼ノ青年ナルモノハ」という語り口で、〈青年〉に将来の社会の建設者としての可能性を秘める存在²⁸、新しいものを積極的に取り入れ「流行」の先端を行く存在²⁹ という新しい意味づけを行っている。さらに、「青年」「大人」「老人」という世代論を展開する中で新時代の建設者としての〈青年〉を立ち上げ³⁰、その〈青年〉に明治維新に続く「知識世界ノ第二ノ革命」³¹ の実行者という役割を与えたのである。

しかし、新時代の建設者となり得る〈青年〉とは、あくまで「大人」＝「知識世界ノ大先達タル学者先生」＝「革命ノ率先者」によって「泰西的」な「教育」を施された〈青年〉であった³²。そもそも後に「第十九世紀日本ノ青年及其教育」と命名され活字化されたこの演説の重点は、「青年」よりも「其教育」、つまり「青年」を育成するための「教育」に置かれていた。すなわち、「器械的」な「一ノ規矩準繩ノ下ニ教育」を行う「官立学校」に対する、「思想ノ自由ヲ圧縛」されることなく「知徳一途ノ教育法」を採る「民間私立学校」の優位³³ を説くことに主眼があったのである。〈青年〉とは、あくまでその「教育」の成果物であり、『自助論』と『西洋品行論』で説かれる「泰西的ノ道義」に従う〈青年〉、つまり実利主義を排して努力・勤勉・忍耐などの精神的価値を重んじる〈青年〉である³⁴。ここで蘇峰が塾生に向けて伝えたかったことは、「諸君ハ第十九世紀文明ノ世界ニ立ツ。不羈独立ナル青年ナルヲ忘ル可ラズ」ということ、つまり「学問及教育世界」の「改革家」であることの自覚であった³⁵。この時満22歳であった蘇峰は、自らを「大人」、数歳年下の塾生たちを〈青年〉と位置づけ、それぞれの役割を明確にしつつ世代としての〈青年〉を構築したのである。蘇峰が説く〈青年〉とは、「大人」「老人」との関係で説かれる一つのまとまりを持った存在であり、「教育」されるべき存在、明治維新に続く「知識世界ノ第二ノ革命」の主体であることを自覚させるべき存在であった。

同様の〈青年〉は、「第十九世紀日本ノ青年及其教育」脱稿後も『大江義塾雑誌』において説かれ続けている。例えば、明治19（1886）年1月の大江義塾「開校ノ祝詞」（開校は今日で言う始業にあたる）では、「現時ノ青年」は「物ニ慣レ易キモノ」で「朝ニ民権ヲ説キ、夕ニ官権ヲ唱ナヘ」る有様であるが、「吾人ハ之ヲ覆シテ、今日ノ青年ハ自主独立ノ気風ヲ有スルノ青年ナリト言ハシムルニ至ラザル可カラズ」と³⁶、「現時ノ青年」を改良すべき存在と位置づけている。このように、大江義塾時代の蘇峰は、〈青年〉を「知識世界第二ノ革命」の実行者

として持ち上げつつも、それはあくまで「革命の率先者」たる「大人」によって教育されるべき存在、つまり「改良され導かれるべき存在」であった。

3. 「立志の青年」

明治18(1885)年、蘇峰は「第十九世紀日本ノ青年及其教育」を東京で300部ほど配布した際³⁷、『東京経済雑誌』を刊行していた田口卯吉にその内容を絶賛されている³⁸。その縁もあり翌年、蘇峰は脱稿したばかりの『将来之日本』³⁹を手を上京し、同書を田口の経済雑誌社から刊行した。これは蘇峰にとって初の商業出版書であり、そこで明治政府の「武備主義」を強く非難し「生産主義」と「平民主義」を唱えたことで言論人として名を知られるようになった⁴⁰。ただし、『将来之日本』の内容は論理的整合性が激しく欠落しており、植手通有は同書を「恐るべき蘇峰の文章力」が「論理の破綻を覆って」いたと評する⁴¹。また、この段階の蘇峰の言説には、「旧日本」対「新日本」、「旧日本の古老」対「新日本の青年」という二項対立の構図は現れていない⁴²。

蘇峰は同年9月、在京のまま大江義塾閉塾を宣言し、翌明治20(1887)年2月に東京で民友社を設立し雑誌『国民之友』を創刊する⁴³。『国民之友』は創刊直後から発行部数を急激に伸ばした。創刊の翌年、明治21(1888)年の1号あたりの平均発行部数は約12,500部で、これはライバル誌『日本人』の約2倍、『読売新聞』とほぼ同じだとされる⁴⁴。また、『国民之友』は首都圏だけでなく地方都市でも販売されており、商業化に成功した日本で最初の総合雑誌と評される⁴⁵。

では、上京後の蘇峰は『国民之友』を通して、〈青年〉をどのような存在として説いたのだろうか。『国民之友』創刊号の論説「嗟呼国民之友生れたり」において、蘇峰はまず「改革よ、改革よ、汝は決して安息することを得ざるなり……旧日本を破壊して、新日本を建設するは、維新改革の大経綸なり、大目的なりと言はざる可からず、然らば則ち其の目的は既に成就したる乎……彼の改革なるものは、未だ決して其の目的を達せざるなり」⁴⁶と、「維新改革」はまだ達成されていないと主張する。このような「旧日本」を破壊し「新日本」を建設するという構図は、蘇峰においては初出であり、尾崎行雄の政治小説『新日本』の序文にある「旧日本ノ石柱摧ケ幕府倒レテ新日本ノ萌芽発ス」⁴⁷から発想を得たと考えられる。また、蘇峰がまだ熊本にいた明治19(1886)年4月、すでに小崎弘道が『政教新論』において、同じような「旧日本」対「新日本」という枠組みで、明治維新では社会の維新がまだ達成されておらず真の維新はこ

れからだということ論じている。小崎はこの著作の趣旨を、「我新日本を製出するに我国従来文明の基礎たる儒教主義を廃し、之に代るに基督教を以てすべし」⁴⁸ と言う。続けて、現状を「旧日本を去りて未だ新日本に至らず」⁴⁹ と把握し、「基督教を以て」する変革を「旧日本を毀ちて新日本を製造するもの」⁵⁰ と説明し、「嗚呼今日我国は漸く旧日本の港を解纜して將に新日本に向て航せんとする時なり」⁵¹ と宣言する。これは、蘇峰が「嗟呼国民之友生れたり」を発表する約一年前のことである。蘇峰と小崎の距離を考えると、蘇峰における「新日本」「旧日本」という枠組みはオリジナルではなく、小崎と尾崎のレトリックをアレンジしたものだと思われるのが妥当だろう。

ただし、蘇峰の新しさは以下の点にあった。「旧日本の故老は去日の車に乗して漸く舞台を退き、新日本の青年は来日の馬に駕して漸く舞台に進まんとす」⁵² と、「新日本」の建設者、「改革」の主導者として「新日本の青年」という存在を立ち上げたのである。前節で述べたように、大江義塾時代の蘇峰は、「青年」「大人」「老人」で構成される世代論の中で、〈青年〉を「大人」に導かれる存在として説いたにすぎなかった。しかし論説「嗟呼国民之友生れたり」では、「大人」を「封建の分子と泰西の分子と相化合して生産したる雑種の大人中老」⁵³ と「改革」のマイナス要因として位置づける。さらに、「旧日本の古老」を「破壊的の時代」「東洋的の現像」と結びつけ、「新日本の青年」を「建設的の時代」「泰西的の現像」と結び付けることで⁵⁴、「明治の青年」＝「新日本の青年」を「天保の空気を呼吸したる老人」⁵⁵ と真っ向から対置し、「改革の健児」として立ち上げたのである⁵⁶。

蘇峰は当時の日本を「不完全の新日本」⁵⁷、つまり「旧日本より新日本に入る一大過」⁵⁸ と捉え、世の中を「旧日本」を護る勢力と「新日本」を建設する勢力に二分する。その勢力を二分する要因、つまり「天保の空気を呼吸したる老人」と「明治の青年」という対立構造の本質を、蘇峰は社会的な立場ではなく、思想や信仰する宗教の違いでもなく、いつの時代の「知識世界」⁵⁹ において成長したのかに見出した。両者の本質的な違いを、「士族平民の相違」、「貧富の相違」、「都鄙の相違」、「治者と被治者の相違」ではなく、「年齢の相違」に見出したのである⁶⁰。すでに「第十九世紀日本ノ青年及其教育」において「知識世界第二ノ革命」の実行者と位置づけていた〈青年〉に、ここで新たに「天保の空気を呼吸したる老人」に対抗する「新日本の青年」＝「改革の健児」という世代としてのまとまりを持たせ、読者に向けて発信したのである。このような〈青年〉は、同時代的に見て斬新で新奇な存在だった。たとえば、前述した小崎でも、〈青年〉をただ「若い」という意味でしか用いておらず⁶¹、ゆえに〈青年〉は、主題にも、論の

核概念にもならなかったのである。

では、蘇峰はなぜこのような新しい存在＝〈青年〉を創出したのだろうか。それを直接説明する史料はないが、ここで注目したいのは、その創出の場が『国民之友』創刊号だったことである。つまり、『国民之友』が目指す「改革」の主導者は、雑誌『国民之友』とともに誕生したのである。〈青年〉とは、「すでにいる誰か」ではなく、『国民之友』の読者として『国民之友』とともに誕生した概念であり、言い換えれば『国民之友』の読者に与えられたアイデンティティだった。

『国民之友』の創刊後、蘇峰は大江義塾時代に著した「第十九世紀日本ノ青年及其教育」の出版要請を集成社から受け、新たに序章「新日本之青年」を加え、『新日本之青年』と題して刊行した⁶²。ゆえに、『新日本之青年』は序章で説かれた〈青年〉と本文における〈青年〉とはその意味も与えられた役割も異なる。以下、その相違点を浮かび上がらせることで、上京直後に蘇峰が新たに立ち上げた〈青年〉には何が求められたのかを明らかにしよう。

「第十九世紀日本ノ青年及其教育」における〈青年〉は、前節で考察したとおり「大人」によって導かれる存在、改良すべき存在である。一方で論説「嗟呼国民之友生れたり」の発表後に書かれた序章「新日本之青年」における〈青年〉は、新時代の建設者としての意味付けが「嗟呼国民之友生れたり」における「明治の青年」よりもさらに強化されている。すなわち、「ソレ青年ハ社会運動ノ旗頭ニ立ツモノナリ。生理学者ノ断定ニ於テコソ、老人ハ老人ニシテ、青年ハ青年ナレドモ、哲学者ノ眼中ニ於テハ却テ白髪憔悴ノ稚児ヲ見、紅顔妙齡ノ老人ヲ見ル可シ」⁶³と、年齢だけではなく「社会運動ノ旗頭」に立っているかどうかを〈青年〉かどうかの基準とされる。「明治ノ青年ハ天保ノ老人ヨリ導カル、モノニアラスシテ。天保ノ老人ヲ導クモノナリ」⁶⁴と蘇峰が「明治ノ青年」と「天保ノ老人」を対峙させた時、その〈青年〉である条件には、単なる明治生まれ世代であるということにとどまらず、「改革の健児」たるべき志が求められたのである。続けて蘇峰は、「明治ノ青年」を「蒼天ニ飛揚スルノ猛志ヲ懐抱シ。其ノ鋭眼ヲ撥キ。其ノ健翼ヲ鼓シテ。一起一抔セハ。超然高挙。以テ清爽潔白ノ天地ニ移住スル敢テ難キニアラサル」という猛々しい存在として語り、「明治ノ青年何ソ飛揚セサル。飛揚セサル」と、万感の期待を込める⁶⁵。このように、世代区分を超え、立志し社会に「改革」をもたらす存在という意味が前面に出た新たな〈青年〉像、つまり「立志の青年」とも言うべき存在には、同時に「期待」という新たな眼差しが込められていたのである。

4. 仮想敵としての「壮士」

蘇峰は、『新日本之青年』を刊行した3ヶ月後、『国民之友』誌上で「新日本の青年及び新日本の政治」を連載し始める。この連載の狙いは、初回のサブタイトルが「青年書生は政治運動の要素なり」であるように、「政治運動」の主体として「青年書生」を創出することに絞られていた。大江義塾時代に蘇峰が説いていた改良され導かれるべき存在としての〈青年〉の姿は、もはやここでは完全に消え、主体的・能動的な「一の至大至強の階級」としての「青年書生の階級」が創出される⁶⁶。そしてここでの「政治運動」は、旧来の民権派とはまったく別の路線が目指されていた。蘇峰はこの連載の第二回において、「福島事件、高田事件、加波山事件、埼玉事件、飯田事件、静岡事件、近くは大阪の獄」などを惹起したのは「多くは青年壮士の仲間なり」と注意を促し、「明治の最近十年間、政変の歴史は、壮士の歴史なり、之を切言すれば乱暴の歴史なり、失敗の歴史なり、而して亦悲嘆の歴史と言はさる可らず、斯る始末に立ち到るも、詮し来れば其の勢力を誤用したるの一点に外ならず」と、誤った「青年書生の一隊より成り立ちたるもの」としての「壮士」なる存在を創出、批判する⁶⁷。つまり「壮士」とは、「乱暴」「失敗」「悲嘆」と関連付けられた存在であり、「精神元気」の使い方を誤った⁶⁸、〈青年〉の失敗例とも言うべき存在であった⁶⁹。

では、蘇峰はなぜ「壮士」なる存在をわざわざ立ち上げたのか。蘇峰は続けて言う。

彼の書生の政論を禁するものは、一方に於ては政治の元気を銷亡せしめ、他方に於ては卑屈の人民を作為すものなりと言はさる可らず……何人の力を以てするも青年書生の勢力を、政治世界より放逐する能はさるなり、凡そ狂詭過激なる書生の勢力は、禁圧されたる重囿の中より破裂し来るものなり、蓋し压抑の政治は、革命党の醸造場なり……青年の勢力の誤用を恐れて、之を禁圧せんとするは、偶ほ其の誤用をして愈よ咆哮せしむるに外ならず、吾人は甚だ恐る、論者か撲滅せんとする壮士の怪物は、却て其の撲滅手段中より激成し来らんことを⁷⁰

ここでの「書生の政論を禁するもの」が明治16（1883）年の新聞紙条例を指すことは間違いないだろう。具体的には、大江義塾閉鎖後に上京した同塾出身者たちのことが念頭にあったと思われる。彼等の多くは上京後に東京専門学校に入学、蘇峰が『国民之友』を創刊すると自ら〈青年〉を名乗り、明治20（1887）年7月に東京に本局を置く青年協会を設立、翌月に雑誌『青

年思海』を創刊する⁷¹。しかし、新聞紙条例⁷² 第八条で定められた政治言論を載せるための保証金500円を納めることができず、同誌を通しての活動は「不完全燃焼」⁷³とならざるを得なかった。蘇峰は、先の激化事件とこのような彼らの置かれた状況に鑑み、「青年書生」の言論活動をいくら抑圧しても、いやむしろ抑圧すればするほど、彼らに唯一残された手段である直接行動に出て「破裂」＝「壮士」化するのではないかという危機感を抱いていたのである。つまり「壮士」は、民権派や「旧日本」と結び付けられた単なる過去の遺物ではなく、また〈青年〉の存在を際立たせるための戦略的概念でもなく、このままでは「青年」たちが「壮士」化し得るといふ蘇峰の危機感から構築された、「青年」の現実的な将来像の一つであった。

前述したように、蘇峰は『国民之友』創刊号の論説において、「旧日本の古老」を「破壊的の時代」「東洋的の現像」、「新日本の青年」を「建設的の時代」「泰西的の現像」と結び付けている。ゆえに蘇峰にとって、「壮士」化する「青年書生」は〈青年〉ではない。〈青年〉とは、蘇峰が思い描く「新日本」建設を主体的に担う者であり、その範疇から外れると〈青年〉を名乗る資格を剥奪されるのである。ただしその範疇は、言論活動か直接行動かといった政治的実践のあり方にとどまらない。蘇峰は、〈青年〉を「進歩の報告者」「改革の案内者」「政治運動の先登者」という将来の建設者として立ち上げながらも、その「改革」「政治運動」の内実を示さず、「裸体」「自然」「質直」「純白」「天真爛漫」に表象される汚れなき存在こそが〈青年〉であるとする⁷⁴。「未来の政治家」たる〈青年〉に向かって、どうすれば「政治家」になれるのか、さらに自分の素質や置かれた環境は「政治家」を目指すにふさわしいのかどうかを「繰り返し繰り返し熟考せられんこと」⁷⁵を勧める一方で、〈青年〉がどのような自己形成をなすべきか、また〈青年〉が有すべき思想、実践すべき運動がいかなるものなのかは、「泰西青年」をモデルにせよというありきたりな提案以外は示さない。つまり、〈青年〉をこれから起こるであろう真の「維新」の政治的主導者、未来の建設を志向する者、すなわち立志こそが最たる特徴である「立志の青年」と位置づけ、期待の眼差しを向けながらも、その「立志の青年」に要求した具体的実践は内実に乏しかったのである。

5. 結語——誕生期の「立志の青年」——

郷里の熊本で大江義塾を開いていた蘇峰は、明治18(1885)年、〈青年〉を初めて主題として説いた。そこでの〈青年〉とは、将来の国家「改革」の実行者であり、大人によって導かれ、改良されるべき存在であった。しかし蘇峰は、明治20(1887)年に上京し雑誌『国民之友』を

創刊すると、〈青年〉を「明治の青年」・「新日本の青年」として語り、老人・大人を導く存在として位置づけなおした。また、その〈青年〉は「改革の健児」であり、国家「改革」の従属的実行者から、「新日本」建設の主導者へと転換されたのである。このことは、あくまで教育の対象であり「改革」の実行部隊だった〈青年〉が、自ら志を建て新時代への「改革」を主導する〈青年〉へと転換され、そこに「新日本」建設への期待の眼差しが向けられたことを意味する。

この明治20（1887）年に誕生した「立志の青年」とも言うべき新奇な存在には、繰り返し「改革」を志すことが説かれた。その「改革」は、旧来の民権派による一連の運動とは区別された新しい「改革」であり、〈青年〉のあるまじき姿として、激化事件などの直接行動に出る「壮士」が立ち上げられた。そこで「壮士」とは、単なる過去の遺物ではない。言論活動を封じられた「青年」が直接行動に出ることへの危機感、つまり「青年」が「壮士」化することへの差し迫った危機感から構築された、予想され得る「青年」の失敗例とも言うべき存在であった。

しかし蘇峰は、「壮士」を反面教師として〈青年〉たる者がどのような自己形成をなすべきなのか、〈青年〉が有すべき思想、将来実践すべき運動がいかなるものなのかは、「泰西青年」をモデルにせよというありきたりな提言に止まった。つまり、「壮士」を仮想敵とし政治的直接行動を戒める一方で、「青年」にはそれに替わる行動指針が提示されなかったのである。また、本稿で論じた誕生期の〈青年〉は、自由民権運動末期という時代背景をもとに存立した、極めて時代限定的な概念であった。この蘇峰に特権的かつ時代限定的な概念である〈青年〉が、いかにして、誰によっても説かれ得る時代の枠に縛られない概念として成立したのかは、別稿⁷⁶にて論じることとしたい。

注

- 1 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社、2011年）47-57頁。
- 2 しかも「若者」でヒットした1点は、「全音流行歌謡ピース」というシリーズものの楽譜で、タイトルは『旅の若者 初恋の駅』。国会図書館では書籍扱いになっているので検索でヒットしたのだが、これを除外したら1964年の「若者」を含む書籍の刊行は皆無になる。
- 3 参考までに、『出版指標年報 2015年版』（全国出版協会出版科学研究所、2015年4月、6頁）をもとに、各年の総刊行点数と、1964年の点数を100とした場合の比率を示しておく

(検定教科書・直販ルート of 出版物・一般市販されない官庁出版物等は含まず)。1964年、13,928点。1974年、19,979点 (143%)。1984年、35,853点 (257%)。1994年、48,824点 (351%)。2004年、56,613点 (406%)。2014年、55,162点 (396%)。1964年に比べて2014年の総刊行点数は約4倍になっているので、そのうち「青年」をタイトルに含む書籍の刊行点数の割合は、ここ50年間で4分の1ほど (刊行点数の増加率に総刊行点数の増加率を除いた数値) に減っているということになる。逆に、総刊行点数における「若者」をタイトルに含む書籍の刊行点数の割合は、ここ20年間で5.7倍 (同前) に増えている。

- 4 林房雄『青年』(講談社、1964年)。
- 5 萩原晃『青年に答う』(中央出版社、1964年)。
- 6 山田秀嶺『青年らしい手紙文の書き方』(日本文芸社、1964年)。
- 7 荒井輝久『軽井沢を青年が守った 浅間山米軍演習地反対闘争1953』(かもがわ出版、2014年)、岩田文昭『近代仏教と青年 近角常観とその時代』(岩波書店、2014年)、北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』(岩波書店、2014年)、中野目徹『明治の青年とナショナリズム 政教社・日本新聞社の群像』(吉川弘文館、2014年)。
- 8 村上龍『逃げる中高年、欲望のない若者たち』(幻冬舎、2014年)。
- 9 前掲『絶望の国の幸福な若者たち』。
- 10 海老原嗣生『「若者はかわいそう」論のウソ——データで暴く「雇用不安」の正体——』(扶桑社、2010年)。
- 11 かつてこの問題を問うた大村恵は、問う準備ができていないことを断った上で、「誤りを恐れずにいえば、日本の社会が、青年の発達段階としての固有の価値を見失ってしまったのではないだろうか。それが青年という概念を使うことにためらいを感じさせ、単に年若い者として、一人前でないというニュアンスを持つ若者という呼称を選ばせているのではないか」(大村恵「教育学からの青年論——若者と青年との間——」日本科学者会議『日本の科学者』第37巻第9号、2002年9月、38頁)と推測している。
- 12 岡和田常忠「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質」『思想』(第514号、1967年4月、37-57頁)、木村直恵『〈青年〉の誕生——明治期日本における政治的実践の転換——』(新曜社、1998年)など。
- 13 ある概念を獲得したことで新たに何かが表現可能になることは、その概念の魅力であろうし、また何かを評論する際の「使い勝手の良さ」も同様に魅力だと考える。

- 14 和崎光太郎「近代日本における「青年期」概念の成立——「立志の青年」から「学生青年」へ——」京都大学大学院人間・環境学研究科『人間・環境学』（第19号、2010年12月、35-46頁）、和崎光太郎「近代日本における「煩悶青年」の再検討——1900年代における〈青年〉の変容過程——」教育史学会機関誌編集委員会『日本の教育史学』（第55集、2012年10月、19-31頁）。
- 15 北村三子『青年と近代 青年と青年をめぐる言説の系譜学』（世織書房、1998年）14-33頁。ここで北村は、『南総里見八犬伝』では稀に「青年」が用いられ、そこでは「青年」が「うらわか」「としわか」「わかうど」と読まれていたことを指摘している。また、明治11（1878）年9月に学習院内に設置された中学生用寄宿舎の名称が「青年舎」とされた事例があるが（学習院編『学習院史 開校五十年記念』昭和3年、236頁）、その読み方は不明である。
- 16 多仁照廣『青年の世紀』（同成社、2003年）28-30頁。なお、大申隆吉は、小崎による翻訳以前の明治12（1879）年に福島のみ権運動家が「青年学校」を構想していたと述べているが（大申隆吉「青年論の系譜」『教育』第294号、1973年10月、62-63頁）、筆者はその史料を確認できていない。
- 17 小崎弘道「七十年の回顧」『小崎弘道全集 第三巻』（小崎全集刊行会、昭和13年）42-43頁、初出は昭和2年。
- 18 前掲『青年の世紀』31-36頁。
- 19 前掲「青年論と世代論——明治期におけるその政治的特質」37-57頁。
- 20 前掲『〈青年〉の誕生——明治期日本における政治的実践の転換——』131-205頁。
- 21 大江義塾は、明治15（1882）年9月から明治19（1886）年9月まで熊本県託麻郡大江村（現熊本市）で開かれていた民権私塾（片桐芳雄「民権的学塾の教育——大江義塾と熊本の自由民権運動」国民教育研究所・「自由民権運動と教育」研究会編『自由民権運動と教育』草土文化、1984年、308、337頁）。塾生は「原則として満14歳1ヶ月以上大学年齢にいたるまでの男子」であり、修学年限は3年間とされた（鹿野政直「一民権私塾の軌跡——大江義塾の小歴史——」『思想』536号、1969年2月、54-55頁）。
- 22 花立三郎・杉井六郎・和田守編『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』（三一書房、1978年）336頁。
- 23 前掲『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』544-545頁。
- 24 「中立青年党募集ノ旨意書」『穎才新誌』（第223号、明治14年9月3日）2-3頁。

- 25 「青年自由党設立ノ旨意」『穎才新誌』(第233号、明治14年11月12日) 2-3頁。
- 26 花立三郎『大江義塾 一民権私塾の教育と思想』(ペリかん社、1982年) 53頁。
- 27 徳富蘇峰「第十九世紀日本ノ青年及其教育」『新日本之青年』(『明治文学全集34 徳富蘇峰集』筑摩書房、1974年、初出は明治18年6月) 123頁。「第十九世紀日本ノ青年及其教育」は、後に『新日本之青年』が刊行された際、その主たる論文として収録されている。
- 28 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」123頁。
- 29 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」125頁。
- 30 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」124頁、135頁。
- 31 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」147頁。
- 32 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」147頁、151頁。「革命ノ率先者」の「革命」は、明治維新ではなく「知識世界ノ第二ノ革命」を指す。
- 33 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」149-150頁。大江義塾での蘇峰の教育実践では、塾生の自主(「不羈独立」)性が何よりも重んじられたとされる(前掲「一民権私塾の軌跡——大江義塾の小歴史——」62頁、前掲「民権的学塾の教育——大江義塾と熊本の自由民権運動」317-324頁、前掲『大江義塾 一民権私塾の教育と思想』83-88頁)。ここで蘇峰が語る「私立民間教育」の優位とは、蘇峰自身が大江義塾で目指したものであったと考えられる。
- 34 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」149頁。
- 35 前掲「第十九世紀日本ノ青年及其教育」151-154頁。
- 36 「開校ノ祝詞」前掲『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』596-598頁。同じく『大江義塾雑誌』に明治19(1886)年6月に掲載された「政治ヲ改革セント欲セバ先ツ人ヲ改革セザル可ラズ」(前掲『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』673-674頁)でも同様のことが説かれている。
- 37 蘇峰は自伝で、「東京の友人に托し、三百部ばかり印刷して、それぞれ配布することゝした……誰と言ふ事もなく、望みの人に渡し、若くは予の方から贈りて、批評を求めたる向きもあった歟と覚えている」(徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、昭和10年、205頁)と回想している。
- 38 田口卯吉「叙」徳富猪一郎『新日本之青年 再版』(集成社、明治20年) 1-2頁。なお田口の序文は明治20年4月刊行の初版には掲載されておらず、同年8月の再版以降の掲載。
- 39 徳富猪一郎『将来之日本』(経済雑誌社、明治19年)。

- 40 前掲「叙」1 - 2頁。
- 41 植手通有「解題」前掲『明治文学全集34 徳富蘇峰集』379頁。
- 42 前掲『将来之日本』。「将来之日本」とは、「過去ノ日本」、「現今ノ日本」の延長線上にあるものであって、改革を経た「新日本」ではない。
- 43 大江義塾閉塾から『国民之友』創刊までの蘇峰の動向については、関連人物の書簡類を用いて詳細に検討した杉井六郎「民友社の背景とその成立」同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』（雄山閣、1977年、16-67頁）を参照されたい。なお、杉井は民友社結成を通説より1ヶ月前の明治20年1月としているが、この違いは何をもって民友社結成とみなすかに起因する。本研究では同年2月の『国民之友』創刊を民友社結成とした。
- 44 有山輝雄「言論の商業化——明治20年代『国民之友』」成城大学『コミュニケーション紀要』（第4号、1986年7月）9-11頁。
- 45 前掲「言論の商業化——明治20年代『国民之友』」11-17頁。
- 46 「嗟呼国民之友生れたり」『国民之友』（第1号、明治20年2月15日）13-15頁。
- 47 尾崎行雄「自序」『新日本 初巻』（集成社・博文堂、明治19年）1頁。
- 48 小崎弘道「政教新論」前掲『小崎弘道全集 第三巻』296頁。初出は明治19年4月。
- 49 前掲「政教新論」302頁。
- 50 前掲「政教新論」299頁。
- 51 前掲「政教新論」300頁。
- 52 前掲「嗟呼国民之友生れたり」22頁。
- 53 前掲「嗟呼国民之友生れたり」18頁。
- 54 前掲「嗟呼国民之友生れたり」22頁。
- 55 前掲「嗟呼国民之友生れたり」18頁。
- 56 前掲「嗟呼国民之友生れたり」21-23頁。
- 57 前掲「嗟呼国民之友生れたり」15頁。
- 58 前掲「嗟呼国民之友生れたり」18頁。
- 59 前掲「嗟呼国民之友生れたり」18-19頁。「知識世界」とは、ある時代における知の枠組みのこと。例えば蘇峰は、儒教道徳が廃れ新しい道徳が確立していない明治10年代後半を指し、「知識世界は懷疑の世界なり」（同上19頁）と述べている。
- 60 前掲「嗟呼国民之友生れたり」18頁。

- 61 前掲「政教新論」301-302頁。「青年の政治家」「青年の人」という具合に、「青年の」= young という用法である。
- 62 前掲『蘇峰自伝』224頁。
- 63 徳富蘇峰「新日本之青年」『新日本之青年』（前掲『明治文学全集34 徳富蘇峰集』、初出は明治20年4月）118頁。
- 64 前掲「新日本之青年」118頁。
- 65 前掲「新日本之青年」119頁。
- 66 「新日本の青年及び新日本の政治（第一）青年書生は政治運動の要素なり」『国民之友』（第6号、明治20年7月15日）1-7頁。なおこの連載のみを冊子にまとめたものが国立国会図書館に残っているが（人見一太郎編『新日本の青年及び新日本の政治』民友社、明治20年）、詳細は不明。
- 67 「新日本の青年及び新日本の政治（第二）明治の歴史こそ其の实例なれ」『国民之友』（第7号、明治20年8月15日）8-9頁。なお、「壮士」が〈青年〉とともに新しく創出された概念であったことは、序章で述べたようにすでに先行研究で明らかにされている。
- 68 前掲「新日本の青年及び新日本の政治（第二）明治の歴史こそ其の实例なれ」13頁。
- 69 色川大吉が指摘するように、蘇峰の「壮士」批判は明治17（1884）年の時点で後の自由党解体を予言するかに書かれた徳富猪一郎『明治二十三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ズ』（自費出版、明治17年、前掲『明治文学全集34 徳富蘇峰集』所収）にまで遡ることができる（色川大吉「明治二十年代の文化」『岩波講座 日本歴史17 近代4』岩波書店、1962年、296頁）。ただし、「壮士」を〈青年〉の失敗例として提示しその提示を通して「青年とは何ぞや」を論じたのは、この論説が初めてである。
- 70 前掲「新日本の青年及び新日本の政治（第二）明治の歴史こそ其の实例なれ」13頁。
- 71 青年協会は、大江義塾出身者を中心とした300名ほどの勢力だったようである（巻末広告『国民之友』第7号、明治20年8月）。大江義塾閉校後の塾生の動向と青年協会及び『青年思海』については、花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』（ぺりかん社、1982年）223-330頁、前掲『大江義塾 一民権私塾の教育と思想』310-334頁を参照。
- 72 太政官布告第一二二号。条例の原文は、松本三之介・山室信一校注『日本近代思想大系11 言論とメディア』（岩波書店、1990年）416-421頁に所収。
- 73 有山輝雄「民友社ジャーナリズムと地方青年」成城大学『コミュニケーション紀要』（第

10号、1995年8月）22頁。

74 「新日本の青年及び新日本の政治（第四）心に記して忘る可らざるもの」『国民之友』（第9号、明治20年10月7日）9-16頁。

75 「新日本の青年及び新日本の政治（第三）未来政治家の覚悟」『国民之友』（第8号、明治20年9月15日）11頁。

76 和崎光太郎「〈青年〉の成立——明治20年代初頭における〈青年〉と「学生」の相克——」中等教育史研究会『中等教育史研究』（第23号、2016年4月）。